徳保薬環セ年報 No.11　61–68（2021）

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（2020 年）

徳島県立保健製薬環境センター
田中　浩基・角宮　由華・河野　郁代

Infectious Diseases Surveillance Reports in Tokushima Prefecture in 2020

Hiroki TANAKA, Yuka KAKUMIYA, and Ikuyo KAWANO

Tokushima Prefectural Public Health, Pharmaceutical and Environmental Sciences Center

Ⅰ　はじめに

当センターでは，「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして，徳島県における感染症の発生情報の収集，解析を行っている．解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し，感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている．

今回，2020 年 1 月から 12 月までの患者発生状況についてまとめたので報告する．

Ⅱ　方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は，「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により指定されている一類から五類感染症，新型インフルエンザ等感染症の 91 疾患（全数把握対象疾患），指定届出機関から届出を受ける 25 疾患（定点把握対象疾患）とした．

感染症の発生情報は，定点把握対象疾患のうち，内科，小児科，眼科及び基幹定点週報分は，月曜日から日曜日までの週単位で，性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った．

Ⅲ　結果及び考察

1　全数把握対象疾患の届出状況（表 1）

（1）一類感染症

一類感染症の届出はなかった．

（2）二類感染症

①　結核

年間届出数は 123 件で，前年（136 件）よりやや減少した．2016 年以降，漸減傾向にある．月別の届出数では，季節的な特徴は認められなかった．類型では，「患者」が 96 件，「無症状病原体保有者」が 25 件，「感染症死亡（疑い）者」が 2 件であった．

届出者を年齢別にみると，50 歳以上から届出数が二桁を超え，50 歳以上が 109 件と全体の約 89%を占めた．性別では，男性 63 件，女性 60 件とやや男性が多かった．

年齢別に類型を比較すると，70 歳以上では「患者」が 76 件（88.4%）と大部分を占めたのに対し，70 歳未満では「患者」が 20 件（54.1%），「無症状病原体保有者」が 17 件（45.9%）と，「無症状病原体保有者」の割合が高かった．

また職業別では，医療・介護などの施設関係者や会社員，タクシー運転手等，人と接する機会が多く集団感染に繋がる環境にある者も見られたことより，感染拡大防止のため施設関係者等に対し感染予防啓発，施設内感染対策の徹底が不可欠と考えられた．

（3）三類感染症

①　腸管出血性大腸菌感染症

年間届出数は 17 件で，前年（14 件）よりやや増加し，過去 5 年間では 2016 年に並び最も多かった．月別では，2，6，8，9，10 月で届出があり，8 月に 7 件，10 月に 5 件と多く報告された．年齢では 50 歳代を除く幅広い年齢層で報告され，性別では男性 9 件，女性 8 件であった．診断の類型では「患者」が 13 件，「無症状病原体保有者」が 4 件と患者が多く報告され，血清型別では本疾患の多くを占める O157 や O111，O121，O156 の血清型が報告された．

「患者」報告例の感染経路や感染源は，経口感染 6 件（肉の喫食 3 件，生肉の喫食 1 件，その他 2 件），不明 7 件で，感染地域は国内 12 件，不明 1 件と推定された．また「無症状病

原体保有者」では，喫食による経口感染2件，「患者」との接触感染が1件，不明1件で，感染地域は国内3件と推定された．

（4）四類感染症

① A型肝炎

1件届出があった．過去5年間では2016年に3件届出られている．患者は20歳代の男性であった．本疾患は潜伏期間が2〜7週間と長いため感染経路の特定には至らなかった．

② つつが虫病

3件届出があった．2019年は届出がなかったが，2016〜2018年まで毎年1〜2件の届出があった．年齢別は60歳代1件，80歳代1件，90歳代1件で，性別は男性2件，女性1件であった．徳島県では秋から初冬にかけて報告が多いとされ，11月と12月に報告があった．感染経路は農作業などの野外活動時に感染したと推定された．徳島県では本疾患をはじめ，重症熱性血小板減少症候群，日本紅斑熱など，病原体を保有するつつが虫やマダニ等の刺咬による感染症が毎年のように報告されている．登山，林業，農作業など野外活動機会の多い中高年者を中心に，ダニ・昆虫媒介性疾患に対する予防対策の啓発が重要と考えられた．

③ 日本紅斑熱

7件届出があった．過去5年間での年間届出数推移は4〜12件と，年毎で差が大きい．届出月は5〜10月と，マダニの活動時期にあたる春から秋に集中していた．年齢は70〜90歳代で，性別は男性4件，女性3件であった．感染経路は農作業等の野外活動時にマダニに刺咬されたと推定されている．

④ レジオネラ症

21件届出があった．過去5年間では最も多い届出数となった．2014年以前は毎年1〜3件の報告数で推移していたが，2016年以降は毎年10件を超えている．本年は11月を除き年間を通して発生し，季節的な特徴は認められなかった．年齢は30，50〜100歳代と幅広い年齢層から報告され，性別は男性15件，女性6件であった．病型は19件が「肺炎型」で，2件が「ポンティアック熱型」であった．推定感染経路は水系感染が5件，塵埃感染が1件，その他3件，不明12件，感染地域は国内19件，国内もしくは国外が1件，不明1件であった．

（5）五類感染症

① アメーバ赤痢

1件届出があった．過去5年間の届出数では3〜7件で推移している．患者は60歳代の男性で，病型は「腸管アメーバ症」であった．推定感染経路は不明で，感染地域は国内と推定された．

② ウイルス性肝炎（E型，A型を除く）

1件届出があった．過去5年間の届出数では1〜2件で推移している．患者は80歳代の男性であった．病型は「B型肝炎」で，感染地域は国内と推定された．

③ カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

7件届出があった．年齢は60〜80歳代と幅広く，性別は男性5件，女性2件であった．推定感染経路は医療器具を介しての感染が2件，以前からの保菌が2件，その他2件，不明1件であった．感染地域は全て国内と推定された．

④ クロイツフェルト・ヤコブ病

2件届出があった．年齢別は50歳代1件，70歳代1件で，性別は男性1件，女性1件であった．病型はいずれも「古典型クロイツフェルト・ヤコブ病」で，感染経路・地域は不明であった．

⑤ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

2件届出があった．年齢別は50歳代1件，70歳代1件で，性別はいずれも女性であった．推定感染経路はともに創傷感染で，感染地域はいずれも国内と推定された．

⑥ 後天性免疫不全症候群

3件の届出があり，過去5年間では届出数が最も少なかった．年齢別は20歳代2件，40歳代1件で，性別は男性2件，女性1件であった．病型は全て「患者」であった．感染経路はいずれも同性または異性間での性的接触で，国内での感染が2件，国内もしくは国外での感染が1件と推定された．

本年はいずれも医療機関からの届出であったが，例年，県内保健所で実施された無料検査にて発見され，地域連携医療機関での診断，報告につながっている．今後もハイリスク層や発生報告の多い20〜50歳代を中心とした幅広い年齢層に対し，より積極的な普及啓発を推進し，HIV感染の早期発見による早期治療と，感染拡大の抑制に努めることが重要と考えられた．

⑦ 侵襲性インフルエンザ菌感染症

5件の届出があり，過去5年間では届出数が最も多かった．年齢別は10歳未満1件，80歳代2件，90歳代2件で，性別は男性4件，女性1件であった．感染経路は4件が国内と推定されるが，もう1件は不明であった．

⑧ 侵襲性髄膜炎菌感染症

1件届出があった．過去5年間での届出は一度もなかった．患者は90歳代女性であった．感染経路は不明で，感染地域は国内と推定された．

⑨ 侵襲性肺炎球菌感染症

7件届出があった．過去5年間では毎年4〜11件報告されている．年齢別は10歳未満1件，50歳代1件，80歳代3件，90歳代2件で，性別は男性4件，女性3件であった．感染地域は全て国内と推定された．

⑩　水痘（入院例）

3 件届出があった．年齢別は 20 歳代 1 件，40 歳代 1 件，90 歳代 1 件で，性別は男性 1 件，女性 2 件であった．感染経路は全て不明で，感染地域は全て国内と推定された．

⑪　梅毒

23 件届出があった．前年（30 件）よりやや減少した．年齢別では 10～40 歳代で 17 件，50～80 歳代で 6 件と若年層に多く，性別では男性 13 件，女性 10 件と男性が多かった．感染地域は国内での感染が 15 件，不明が 8 件であった．

現在，我が国では若年層を中心に梅毒患者の増加が大きな問題となっている．HIV と同様に，発生報告の多い 10～40 歳代を中心に，感染者及びパートナーともに積極的な感染予防啓発が重要と考えられた．

⑫　播種性クリプトコックス症

2014 年 9 月 19 日より五類全数把握対象感染症に指定され，本年は 2 件届出があった．過去 5 年間では 2018 年に 2 件，2019 年に 3 件報告されている．年齢別は 70 歳代 1 件，80 歳代 1 件で，性別は男性 1 件，女性 1 件であった．原因は免疫不全 1 件，不明 1 件で，感染地域は国内と推定された．

⑬　破傷風

1 件届出があった．過去 5 年間では 2019 年を除き，毎年数件の届出があった．患者は 70 歳代の女性であった．感染経路は創傷感染で，感染地域は国内であった．

⑭　バンコマイシン耐性腸球菌感染症

1 件届出があった．過去 5 年間での届出は一度もなかった．患者は 90 歳代の男性で，感染経路は腸管穿孔によるもので，感染地域は国内であった．

⑮　百日咳

百日咳はこれまで小児科定点把握疾患として報告されていたが，2018 年 1 月 1 日より五類全数把握対象感染症に指定された．2018 年の届出数は 31 件，2019 年は 80 件と増加傾向であったが，本年は 3 件と大幅に減少した．年齢別は 10 歳未満 2 件，60 歳代 1 件であった．性別は男性 1 件，女性 2 件であった．感染経路は学校での感染 1 件，不明が 2 件であった．感染地域は国内 2 件，不明 1 件であった．

（6）新型インフルエンザ等感染症

①　新型コロナウイルス感染症

令和 2 年 2 月 1 日より指定感染症に制定され，令和 3 年 2 月 13 日からは，期限の定めなく対策が講じられるよう，新型インフルエンザ等感染症の中に新型コロナウイルス感染症，再興型コロナウイルス感染症を追加することと改正された．届出数は 199 件であった．月別の届出数は県内 1 例目の届出があった 2 月以降，5 月を除き毎月届出があった．年間届出数の約 5 割を占めた 8 月の 107 件が最も多く，医療機関や介護施設等などで複数の集団感染が発生した．次いで 7 月 20 件，12 月 18 件の順に多かった．旅行や帰省など人々が移動する機会が多い時期に感染者が増加する傾向が認められた．年齢別では，20 歳代が 43 件と全体の約 22%を占めた．続いて 60 歳代 27 件，50 歳代 26 件，70 歳代 23 件の順に多かった．性別では男性 106 件，女性 93 件で男性の方がやや多かった．また医療・介護施設や学校などでの集団感染が見られたことより，感染拡大防止のため施設や学校関係者等に対し感染予防啓発，施設内感染対策の徹底が不可欠と考えられた．

表 1　全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	2020年	前年
二類	結核	123	136
三類	腸管出血性大腸菌感染症	17	14
四類	A型肝炎	1	0
	つつが虫病	3	0
	日本紅斑熱	7	12
	レジオネラ症	21	13
五類	アメーバ赤痢	1	7
	ウイルス性肝炎（E型，A型を除く）	1	2
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	7	11
	クロイツフェルト・ヤコブ病	2	3
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2	4
	後天性免疫不全症候群	3	4
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	5	4
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1	0
	侵襲性肺炎球菌感染症	7	11
	水痘（入院例）	3	5
	梅毒	23	30
	播種性クリプトコックス症	2	3
	破傷風	1	0
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1	0
	百日咳	3	80
(※)	新型コロナウイルス感染症	199	―

(※)：新型インフルエンザ等感染症

2　定点把握対象疾患（週報）の動向（表 2）

（1）内科，小児科定点

①　インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

年間報告数は 3,095 件と，前年（10,024 件）より大きく減少した．本年の前期は，昨年より早く 2019 年第 48 週から流行期に入り，2019 年第 51，52 週で注意報レベル（10 件／定

点）を超えた．2020年第1週で注意報レベルを割ったものの，再び第2週から注意報レベルを超え，第4週で報告数のピーク（16.4件／定点）を迎えた．ピークの高さは前年（42.6件／定点）より大幅に低く，報告数が注意報レベルを超えた期間（2019年第51，52週および2020年第2週～第5週）は，前年（第2週～第7週）と変わらなかった．後期流行については，流行開始の目安とされる1.0件／定点を超えることなく，低水準（0.00～0.05件／定点）のまま越年した．

年齢層別報告数では，4歳以下16.8%，5～9歳25.8%，10～14歳19.3%，15～19歳5.5%，20歳以上32.6%であり，前年と比較して，10～14歳の割合が高かった．

（2）小児科定点

① RSウイルス感染症

年間報告数は140件と，前年（1,862件）より大きく減少した．本疾患は，2016年以前は主に秋から冬にかけて流行していたが，2017年以降は7月頃から報告数が増加し，9月初旬にピークを迎え，夏から秋にかけて流行している．しかし本年は季節的な変化がなく，年間を通して目立ったピークも無いまま低い報告数（0.00～0.83件／定点）で推移した．全国平均も同様であった．

本疾患は2歳までの乳幼児からの報告が多く，本年の年齢層別報告数でも，0歳54.3%，1歳20.0%，2歳9.3%，3歳6.4%，4歳以上10.0%であり，前年と同様に2歳以下の乳幼児の割合が大半（約84%）を占めた．

② 咽頭結膜熱

年間報告数は222件と，前年（563件）より大きく減少した．本疾患の流行パターンは，4月ごろから報告数が増加し始め，7～8月にピークを示した後，冬季にも流行のピークが見られる．本年は6月上旬頃より報告数が増加しはじめ，第28週に小さなピーク（0.52件／定点）を示した．7月は全国平均を上回ったが，年間を通じて低い報告数（1.0件／定点以下）で推移した．

年齢層別報告数は，0～1歳54.5%，2～3歳29.7%，4～5歳8.6%，6～7歳2.7%，8歳以上4.5%であり，5歳以下が約93%を占めた．

③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は475件と，前年（772件）より大きく減少した．本疾患は，冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされる．本年は，昨年と同様に年当初から報告数が少なく年間を通して目立ったピークも無く報告数の低い状態が続いた．

年齢層別報告数は，0～1歳4.2%，2～3歳19.6%，4～5歳31.8%，6～7歳20.0%，8～9歳10.9%，10～14歳8.2%，15歳以上5.3%と，幼児や低学年児童の割合が高かった．

④ 感染性胃腸炎

年間報告数は3,365件と，前年（6,192件）より大きく減少した．本疾患の流行パターンは，初冬から増加し始め12～1月頃に一度ピークが見られた後，春にもう一つ緩やかなピークを示すことが多い．本年の前期流行は，第3～9週までは報告数が多かったものの，以降は減少し，年間を通して一定の水準（2.0件／定点）前後で推移した．12月頃にわずかに増加したものの目立った後期流行はなかった．

年齢層別報告数は，0～1歳29.7%，2～3歳23.0%，4～5歳11.3%，6～7歳6.3%，8～9歳5.0%，10～14歳10.5%，15歳以上14.2%と5歳以下の乳幼児が全体の約64%を占めた．

⑤ 水痘

年間報告数は192件と，前年（262件）より減少した．本疾患は年間を通して発生するが，主に冬から春にかけて流行し，夏から初秋は減少するとされる．本年も年間を通して報告され，2月中旬に県内の一部地域において地域流行など見られたものの，大きなピークは見られず，年間を通じて低い報告数（0.00～0.74件／定点）のまま推移した．

年齢層別報告数は，0～1歳9.4%，2～3歳17.7%，4～5歳26.1%，6～7歳20.8%，8～9歳13.5%，10歳以上12.5%と10歳未満の報告が全体の約88%を占めた．

⑥ 手足口病

年間報告数は71件と，前年（2,086件）より大きく減少した．本疾患は夏に流行する代表的な感染症であり，例年7～8月にピークを迎えるが，本年は年当初から報告数が少なく年間を通して目立ったピークも無く，報告数（0.00～0.30件／定点）の低い状態が続いた．年齢層別報告数は，0～1歳46.5%，2～3歳38.0%，4～5歳9.9%，6～7歳1.4%，8歳以上4.2%であり，5歳以下からの報告が全体の約94%を占めた．

⑦ 伝染性紅斑

年間報告数は115件と，前年（666件）より大きく減少した．本疾患は，年始頃より7月上旬にかけて増加するが，流行の小さい年は季節性が見られないことが多い．本年は第2週でピーク（1.0件／定点）となり，全国平均を上回っていたが，第14週以降は年間を通じて低水準（0.00～0.09件／定点）で推移した．年齢層別報告数は，0～1歳8.7%，2～3歳28.7%，4～5歳33.0%，6～7歳19.1%，8～9歳7.0%，10歳以上3.5%と，4～5歳の幼少児での割合が高かった．

⑧ 突発性発しん

年間報告数は514件と，前年（470件）より増加した．本疾患は，季節性も年次推移も認められず，年間を通じてほぼ一定の範囲内で推移するとされる．本年もピークは示さず，大きな季節的変動も見られないまま，報告数は一定の範囲内（0.04～0.78件／定点）で推移した．

年齢層別報告数は，0～1 歳 91.8%，2～3 歳 7.2%，4～5 歳 0.6%，6 歳以上 0.4%と，1 歳以下が最も多く報告され，3 歳以下で大半（約 99%）を占めた．

⑨　ヘルパンギーナ

年間報告数は 170 件と，前年（486 件）より大きく減少した．本疾患は，手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である．本年は，10 月中旬より報告数が増加しはじめたものの，増加は緩やかであり，第 51 週にピーク（1.30 件／定点）を示した．

年齢層別報告数では，0～1 歳 42.4%，2～3 歳 47.6%，4～5 歳 8.8%，6～7 歳 0.6%，8 歳以上 0.6%であり，5 歳以下の乳幼児が約 99%を占めた．

⑩　流行性耳下腺炎

年間報告数は 50 件と，前年（56 件）よりわずかに減少した．本疾患は年間を通して発生するが，晩冬から春にかけて報告数が増加するとされる．また，3～4 年ごとの周期で流行を繰り返すが，本年では流行は見られず年間を通して低値（0.00～0.13 件／定点）で推移した．

年齢層別報告数は，0～1 歳 4.0%，2～3 歳 20.0%，4～5 歳 24.0%, 6～7 歳 28.0%, 8～9 歳 16.0%, 10 歳以上 8.0%であり，4～7 歳の幼小児からの報告数が約 52%を占めた．

（3）眼科定点

①　急性出血性結膜炎

本年は報告がなかった．過去 5 年間では 2019 年（3 件）を除き毎年 0～1 件で推移し，徳島県内での流行は認められていない．

②　流行性角結膜炎

年間報告数は 29 件と前年（117 件）より減少した．過去 5 年間で最も少ない報告数となった．県内では年々増加傾向にあったが，本年は大幅に減少した．年齢層別報告数は，10 歳未満 3.5%，10 歳代 10.3%，20 歳代 20.7%，30 歳代 41.4%，40 歳代 17.2%，50 歳代 6.9%，60 歳以上 0.0%と主に 20～40 歳代の年代層が多かった．

（4）基幹定点

①　細菌性髄膜炎

年間報告数は 3 件と，前年（3 件）と同数であった．年齢層別報告数は 1 歳未満 1 件，40 歳代 1 件，70 歳代 1 件であった．過去 5 年間では，毎年 0～4 件で推移している．

②　無菌性髄膜炎

年間報告数は 4 件と，前年（7 件）より減少した．年齢層別報告数は 10 歳代 1 件，30 歳代 1 件，60 歳代 1 件，80 歳代以上 1 件であった．過去 5 年間では，毎年 2～7 件で推移している．

③　マイコプラズマ肺炎

年間報告数は 43 件と，前年（131 件）より減少した．本疾患は年間を通して発生するが，秋から冬にかけてやや多くなるとされる．本年は第 1 週～13 週は全国平均を上回る水準（0.00～0.86 件／定点）で推移したものの，第 14 週以降は低水準（0.00～0.14 件／定点）で推移した．

年齢層別報告数は，5 歳未満 18.6%，5～9 歳 39.5%，10 歳代 23.3%，20 歳以上 18.6%と，幅広い年齢層から報告された．学童期を含む 10 歳未満からの報告数（約 58%）が他の年齢層に比べ多かった．

④　クラミジア肺炎

本年は報告がなかった．過去 5 年間では，毎年 0～1 件で推移している．

⑤　感染性胃腸炎（ロタウイルス）

年間報告数は 1 件と，前年（8 件）より減少した．年齢層別報告数は，5～9 歳 1 件であった．例年，年当初から春先にかけて多く，夏季は減少するなど季節的な特徴があるが，本年は件数が少ないため季節的な特徴は認められなかった．

3　定点把握対象疾患（月報）の動向

（1）基幹定点（表 3）

薬剤耐性菌感染症の総報告数は 272 件と，前年（282 件）より減少した．

①　メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

年間報告数は 269 件（男性 152 件，女性 117 件）であり，前年（276 件）よりやや減少した．月別報告数では，月毎に増減はあったものの季節的な特徴は認められず，年間を通じて報告された．

年齢層別報告数は，10 歳未満 7.4%，10 歳代 0.7%，20 歳代 3.0%, 30 歳代 1.5%, 40 歳代 3.4%, 50 歳代 4.1%, 60 歳代 12.6%, 70 歳以上 67.3%と，60 歳以上からの報告が多かった．

②　ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

年間報告数は 1 件で，前年（3 件）より減少した．患者は 90 歳代の女性であった．

③　薬剤耐性緑膿菌感染症

年間報告数は 2 件（男性 1 件，女性 1 件）と，前年（3 件）より減少した．年齢層別報告数は 70 歳代 1 件，80 歳代 1 件の報告であった．

過去 5 年では，2019 年を除き，毎年 0～1 件の届出数で推移している．

（2）性感染症定点（表 4）

性感染症の総報告数は 555 件で，前年（679 件）より減少した．男女別では，男性 402 件（前年 442 件），女性 153 件（前年 237 件）と，前年と比べ男女ともに報告数が減少した．

表 2　内科，小児科，眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期間	インフルエンザ	小児科定点										眼科定点	
		インフルエンザ	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	12/30～	309	5	11	6	73	1	2	7	4				
2	1/6～	599	10	11	15	113	9	3	23	5		1		3
3	1/13～	586	3	8	18	147	4	7	5	7				2
4	1/2～	605	8	7	24	183	5	2	16	9				1
5	1/27～	405	10	4	19	193	12	1	10	7				2
6	2/3～	216	12	11	15	218	7		12	6				
7	2/10～	159	19	6	18	184	10		5	6				
8	2/17～	90	6	2	19	159	17	2	4	7		2		
9	2/24～	69	10	7	14	149	5	1	5	8				
10	3/2～	42	5	3	23	61	2		4	6		2		
11	3/9～	9	1	7	11	76	6		4	5				1
12	3/16～		2	5	17	51	7			3		2		1
13	3/23～			1	14	49	2	1	3	6		1		1
14	3/30～	1	2	3	19	46	1	1	1	15				2
15	4/6～	1	3	3	9	50	5		1	4		1		1
16	4/13～	1	3	1	14	48	1		2	7		1		
17	4/20～		1	5	11	39	1			13		1		
18	4/27～			4	11	20		4		8		2		1
19	5/4～		2	1	5	13	4	2	1	8				
20	5/11～		2	3	11	32			2	9				
21	5/18～				9	34	7	2		9				1
22	5/25～		1		6	36	7		1	12	1	1		
23	6/1～			2	5	27		1		11		3		1
24	6/8～		1	2	9	35	4			14	1			
25	6/15～		1	4	6	45		2	2	17				
26	6/22～			4	4	32	2	2		10	2			
27	6/29～		4	6	10	45	6	3		10		3		
28	7/6～		1	12	6	27	3	4	1	18	2	3		
29	7/13～		1	6	6	43	4	6	1	14	1	2		1
30	7/20～		4	6	7	49	2	3		16	2	1		
31	7/27～		1	9	7	56	4	2	1	18		2		
32	8/3～			5	10	58	4	3		14				
33	8/10～		1	3	8	30	1	1		11	1	1		
34	8/17～		3	4		67	1	1	1	14	2	1		
35	8/24～			3	5	45	7	1		9	1	1		
36	8/31～		2	1	5	55				17				1
37	9/7～			2	1	57	2			10	1	1		3
38	9/14～		1	2	3	56	2			14	1	2		1
39	9/21～		1		1	46	3			8	2			1
40	9/28～		1		3	48	4	1		7	2			1
41	10/5～			2	5	41	1			10	4	2		
42	10/12～			1	2	41	2	1		10		2		2
43	10/19～		2	4	5	40	1	1		13	5			1
44	10/26～		2		4	48	2	1		8	6			
45	11/2～			2	4	47	4	1		1	6	2		
46	11/9～			7	11	39	1		1	9	3	2		
47	11/16～	2		4	7	39	3	1		11	8	1		
48	11/23～	1	1	3	3	42	5	1	1	8	8	2		
49	11/30～		1	4	3	45	2	2	1	11	22	2		
50	12/7～			11	6	43	4	1		7	21	2		1
51	12/14～		4	5	5	45	2	2		18	30			
52	12/21～			3	9	70	3	2		8	24	1		
53	12/28～		3	2	7	30				4	14			
合計		3,095	140	222	475	3,365	192	71	115	514	170	50	0	29

表 3　基幹定点（月報）報告対象疾患の月別報告数

	ﾒﾁｼﾘﾝ耐性黄色ﾌﾞﾄﾞｳ球菌感染症	ﾍﾟﾆｼﾘﾝ耐性肺炎球菌感染症	薬剤耐性緑膿菌感染症
1 月	25	1	
2 月	30		1
3 月	20		
4 月	27		
5 月	30		1
6 月	21		
7 月	21		
8 月	15		
9 月	24		
10 月	19		
11 月	22		
12 月	15		
合計	269	1	2
前年	276	3	3

表 4　性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器ｸﾗﾐｼﾞｱ感染症	性器ﾍﾙﾍﾟｽ感染症	尖圭ｺﾝｼﾞﾛｰﾏ	淋菌感染症
1 月	27	18	5	8
2 月	26	15	4	4
3 月	31	17	7	1
4 月	20	11	9	1
5 月	12	12	5	5
6 月	23	16	7	0
7 月	22	17	11	6
8 月	14	15	9	4
9 月	18	10	5	5
10 月	26	15	6	6
11 月	14	18	4	4
12 月	22	14	3	3
合計	255	178	75	47
前年	284	257	79	59

①　性器クラミジア感染症

年間報告数は 255 件と，前年（284 件）より減少した．月別報告数でも，月毎に増減はあったものの季節的な特徴は認められず，年間を通じて報告された．男女別では，男性 224 件（前年 238 件），女性 31 件（前年 46 件）と，男性･女性ともに前年より報告数が減少し，男性（約 88%）の割合が高かった．

年齢層別報告数では，10 歳代 5.5%，20 歳代 43.9%，30 歳代 30.6%，40 歳代 12.9%，50 歳以上 7.1%と，20～30 歳代からの報告が多かった．

②　性器ヘルペスウイルス感染症

年間報告数は 178 件と，前年（257 件）より減少した．月別報告数推移でも，月毎に増減はあったものの季節的な特徴は認められず，年間を通じて報告された．男女別では，男性 72 件（前年 82 件），女性 106 件（前年 175 件）と，男性・女性ともに前年より報告数が減少した．また性感染症全体では男性が女性より多く報告されているが，本疾患は女性が約 60%を占めるなど，女性の割合が他の疾患に比べ高いのが特徴である．

年齢層別報告数は，10 歳代 1.1%，20 歳代 15.2%，30 歳代 24.2%, 40 歳代 20.8%, 50 歳代 15.7%, 60 歳代 8.4%, 70 歳以上 14.6%と，20～50 歳代がやや高かったものの，幅広い年齢層から報告された．また，60 歳以上の高齢者からの報告数が 23.0%と他の性感染症と比較して多い傾向が認められたが，潜伏していたウイルスによる再燃の可能性も考えられる．

③　尖圭コンジローマ

年間報告数は 75 件と，前年（79 件）よりやや減少した．男女別では，男性 60 件（前年 67 件），女性 15 件（前年 12 件）と，男性は前年より報告数が減少し，女性は増加した．全体では男性（約 80%）が多くを占めた．

年齢層別報告数は，10 歳代 1.3%，20 歳代 28.0%，30 歳代 29.3%, 40 歳代 14.7%, 50 歳代 20.0%, 60 歳以上 6.7%と，他の年代に比べ 20～50 歳代からの報告がやや多かったものの，幅広い年齢層から報告された．

④　淋菌感染症

年間報告数は 47 件と，前年（59 件）より減少した．男女別では，男性 46 件（前年 55 件），女性 1 件（前年 4 件）と性器クラミジア，尖圭コンジローマと同じく男性からの報告が多く，約 98%を占めた．

年齢層別報告数は，10 歳代 6.4%，20 歳代 36.1%，30 歳代 29.8%，40 歳代 21.3%，50 歳代以上 6.4%であった．他の性感染症と同様に，20～30 歳代の割合が高く，全体の約 66%を占めた．

Ⅳ　まとめ

2020 年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について動向をまとめた．全数把握対象疾患では「新型コロナウイルス感染症」が最も多く，全体の約 5 割を占め

た．年間届出数は199件で，全国では少ない方であった．月別届出数から，夏休みや年末年始など旅行や帰省が多い時期に増加する傾向が認められた．年齢別では20歳代の若者の割合が高く，性別では男性がやや多かった．またアルファ株やデルタ株などの変異株は感染力が従来株よりも強いとされ，新しい変異株も次々と出現している．今後も手洗いやマスク着用などの感染症対策を徹底することが重要と考えられた．

「結核」の年間届出数は，昨年よりやや減少したが，月別届出数から季節的な特徴は認められなかった．年齢別では50歳以上の高齢者の割合が高く，性別では「男性」がやや多かった．年齢別に類型を比較した場合，70歳以上では約9割が「患者」であったのに対し，70歳未満では「無症状病原体保有者」が約5割近くを占めた．また職業別において，医療・介護などの施設関係者や会社員，タクシー運転手等，人と接する機会が多く集団感染に繋がる環境にある者も見られたことより，感染拡大防止のため施設関係者等に対し感染予防啓発，施設内感染対策の徹底が重要と考えられた．

「腸管出血性大腸菌感染症」は，平成24年（2012年）6月の厚生労働省通知による牛生レバーの提供禁止以降減少したものの，2018年以降は県内では増加傾向にあり，依然として，夏季から秋季に集中して報告されている．感染拡大を防ぐため，手洗い・消毒の徹底，食品の十分な加熱及び衛生的な取り扱いなど予防啓発をしっかり行うことが必要である．

「日本紅斑熱」，「つつが虫病」などマダニ等の刺咬による感染症が，野外作業機会の多い中高年者を中心に多く報告された．ダニ・昆虫媒介性疾患に対する正しい知識の普及とともに，予防対策の啓発も重要と考えられた．

近年，全国的に「梅毒」の届出が増加傾向にあり，徳島県においてもここ数年高い報告数となっている．「後天性免疫不全症候群」と共に，報告の多い20～40歳代を中心に，感染者とそのパートナーに対して，より積極的な感染予防啓発の推進が重要と考えられた．

定点把握対象疾患（週報）では，一部を除き，ほとんどの感染症で報告件数が大きく減少した．「インフルエンザ」，「感染性胃腸炎」，「手足口病」は前年の報告件数から特に減少が大きかった．一方，「突発性発しん」は定点把握対象疾患で前年より唯一増加し，全国平均を上回った．また「細菌性髄膜炎」，「無菌性髄膜炎」など報告件数が少ない感染症は例年とあまり変わらなかった．

定点把握対象疾患（月報）の基幹定点報告疾患である薬剤耐性菌感染症については，総報告数に大きな変化は見られず，「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」が大半を占めた．

また，性感染症定点報告疾患について総報告数は前年と変化がなく，男女別報告数も前年と同様に男性からの報告が多かった．報告数の多い20～40歳代の男性を中心に引き続き予防啓発を行うとともに，10歳代の若年者に対する予防教育も重要と思われた．

2020年は新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより，感染症の発生動向はこれまでと大きく変わった．手洗いやマスク着用など感染対策の徹底により，全体的に感染症の報告件数は減少した．特に感染経路が飛沫感染や接触感染を主とする感染症は大きな減少率を示す傾向がある．一方，報告件数が増加した感染症や変動が少ない感染症もあり，それらの感染症に対しては別の対策を講じる必要があると考えられた．

また乳幼児などの年代は，コロナ禍でのワクチン接種控えや感染する機会の減少で，通常，獲得し得る免疫を獲得できていないことも考えられ，その反動で感染症が今後増加することが懸念される．感染症全体の件数は減少したが，新型コロナウイルス感染症以外の予防啓発や感染対策も重要と考える．

新型コロナウイルス感染症による生活様式の変化や温暖化などの気候変動により感染症の発生動向も変化しており，今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに，迅速かつ適切な情報提供を行っていきたい．